



バッハの森通信

第121号
2013年
10月20日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

バッハと出会う喜び

人生を豊かにする経験

夏休み中に、ライブツィヒから一枚の絵はがきをいただきました。トマス教会の中庭に立つ有名なバッハ像の写真で、嬉しいお便りが記されていました。その一部を紹介しましょう。

「1980年代前半に、筑波バッハ合唱団でお世話になったMです。・・・微生物の学会がたまたまライブツィヒであり、ささやかな研究成果を明後日発表する予定ですが・・・今回は、永年の夢でしたトマス教会の礼拝に参加することができ、感慨ひとしおです。・・・当時、院生だった私は、その後、23年間の研究所勤務を経て、今は高専で教えておりますが、友雄先生、一子先生やバッハとの出会いが、その後の人生を豊かなものにしてくださったことを心から感謝しています。・・・」

* * *

思いがけないお便りをいただいたので、しまい込んであった古い資料を持ち出して、しばし当時のことを思い出しました。一子と私がつくば（当時は新治郡桜村）に移住して来たのは、1976年3月のことです。現在の学園都市からは想像もつかない、ただただ広々とした野原が広がり、建設中の筑波大学と研究所があちこちに建ち、そこに勤務する人たちとその家族のための公務員宿舎が点在するだけという、到底、町とは呼べない奇妙なところでした。しかも、電車はおろか自動車道も開通前でしたから、東京に行くのに何時間もかかる“陸の孤島”でした。

それでも、私の方は、大学で研究と教育に携わることが仕事でしたから、それなりにこれまでの生活を続けることができましたが、それまでずっと教会オルガニストとして活動してきた一子には、特にエルサレムで4年、ハイデルベルクで1年過ごした直後だけに、教会音楽が全くない生活は耐え難い苦痛

でした。そこで、建設途上の学園都市という文化的荒野を人間が住める場所に開拓しようということになり、まずは教会音楽を一緒に楽しむ仲間を集めることになったのです。

いろいろあった末、1980年6月に、皆川達夫氏の紹介で、ドイツから帰国したばかりの樋口隆一氏を指揮者に迎えて、「バッハのカンタータを歌う会」を開きました。第1回は、竹園の石田宅に23名集まったと記録されています。あの狭い公務員宿舎のリビングでは皆立ち続けていたはずですが、心の糧に飢える熱気を感じます。その年に「筑波バッハ合唱団」を立ち上げ、練習場を転々としながら5年間活動しました。Mさんはこの時のメンバーの一人です。

* * *

それからまたいろいろあった後、1985年1月にバッハの森が創設され、「筑波バッハ合唱団」は「バッハの森クワイア」に発展的に解消しました。その4年後にアーレント・オルガンが建造されましたが、これはオーダー・メイドのオルガンでした。実際、ユルゲン・アーレントは、オルガンが一子の背丈に合うよう気をつけてくれました。しかし、もっと大切なことは、バッハのコラール編曲を弾くためのオルガンが欲しいという一子の注文に、ユルゲンが喜んで応えてくれたことです。

若いとき、イーストマンやニューヨーク・ユニオンで学んでいた頃から、なぜかバッハのコラール編曲に深く心を惹かれていたけれど、その意味が本当に分かったのはあとのこと。エルサレムのドイツ教会で、一番の楽しみは皆でコラールを歌うこと、と言って始終楽しそうに歌っていたディアコニッセ（保母や看護師をしている教会の女性奉仕者）たちと出会い、友だちになったときだ、と一子は言っていました。これがバッハの音楽の原点だと悟ったそうです。

Mさんの経験と同じように、これは彼女の人生をさらに豊かにする出会いでした。そして、彼女の出会いを継承したバッハの森で私たちは、バッハと出会う喜びを期待して、学びながら歌っています。皆様のご参加をお待ちしております。（石田友雄）

*去る8月25日に開いた「夏休みの音楽会」の企画運営に尽力して下さった別所香苗さん、司会と輪唱やダンスの指導をして下さった岩淵倫子さん、それに、バッハの森クワイアの指揮者で、5歳のお嬢さん、ご主人と一緒に、一家で参加して下さった比留間恵さんに、音楽会の感想と、バッハの森の今後の活動目標について、それぞれの立場から語っていただきました。

バッハの森という「外国」 大自然のように心に迫る感動の世界

学生時代、よく北アルプスを歩きました。その壮大な景色は大自然への憧れとともに、胸に迫ってきます。大自然は、自分というちっぽけな存在を遙かに凌駕しており、驚嘆すべき美しさと気高さや恐ろしさを併せ持って迫ってくるのです。この世界に生きているということは、なんてすごいことなのだろうかと、心震える思いを抱いたものです。

他方、満員電車で2時間半揺られて大学へ通う毎日は退屈でした。この世界は驚きと感動で満ち溢れているはずなのに、なぜこんなにも退屈なのか、ともがいていました。そんな時に出会ったのがバッハの森です。

学び続ける楽しさ

私にとって、バッハの森はさながら「外国」、そこにいる人たちは「外国人」でした。日本語のはずなのに、耳慣れない言い回しや単語が連なる『聖書』をすらすら読み、当時の私には奇妙に響くフレーズを、いかにも馴染んでいるかのように声を揃えて歌い、それまで写真でしか見たことがなかったパイプオルガンを弾いたり聴いたりする人たちでした。何よりもびっくりしたのは、そこにいる誰もが、いかにも面白そうにしていることでした。言うまでもなく、その筆頭は友雄先生と一子先生でした。大きな口を開けておなかの底から出てくる豪快な笑い声が幾度となく響くのです。もちろん、オルガンや合唱、ハンドベルの美しい響きに心を奪われたことは間違いありませんが、私を惹きつけて止まなかったことは、バッハの森で楽しそうに学ぶ人たちの姿そのものでした。ここには、学び続ける楽しさがあると直感しました。

あれから14年たった今、聖書は壮大なスケールで民族の歴史を語り、現代の私たちに生き方を問いかけてきます。バッハの音楽は、ときに強烈なパワーで、聖書の世界に生きた人たちの歓喜や絶望、忍耐や希

望を再現します。私が生きているこの世界には、学んでも学んでも尽きない感動が溢れていることを実感します。

感動の共有を目指して

一昨年から、親子で一緒に楽しめる「音楽会」を定期的に行っていました。オルガンやチェンバロ、クラヴィコードの演奏に加えて、ハンドベルの体験、ダンスや歌の斉唱など、参加した方々みんなを巻き込んで一緒に楽しむプログラムです。大きなパイプオルガンに目を見張る小学生たち、チェンバロの典雅な調べに耳を傾けるお母さんたち、自分の手よりも大きなハンドベルを恐る恐る振ってみる小さな子どもたち。ちりばめられた美しい音楽の響きに包まれながら、彼らは今まさにバッハの森という「外国」を経験しているのだろうな、と思う瞬間があります。それは、自分が生きている世界を押し広げ、未知なるものに目を向ける瞬間なのです。

これからバッハの森でやりたいこと、それは、美しくも素晴らしい音楽を通して、遠い昔、遠い場所で連綿と伝えられてきた「外国の偉大な文化」に参加し、昔の人々に思いを馳せながら、現在ここで生きている人々と感動を共有することです。そして、この世界は尽きない感動で溢れていることを確かめ合える仲間を増やすことです。なぜなら、それは、必ずや私たちの人生を豊かにし、生きる力として私たちに働きかけることを確信しているからです。

(別所香苗)

* * *

親子で一緒に「楽しむ」音楽会

昨年からはじめた「音楽会」シリーズも、季節を一巡りし、去る8月25日の「夏休みの音楽会」で4回目の開催となりました。オルガンやチェンバロ、クラヴィコードなど、バッハの森にある珍しい楽器の美しい音色を、親しみやすい曲目で味わっていた、ハンドベルやダンスでは皆さんに参加し体験していただいて、一緒に楽しもうという試みです。今回は輪唱やリコーダーの演奏も加わり、一層楽しい集いになりました。

この4回の「音楽会」を通して、まず嬉しかったことは、バッハの森を初めて訪れる多くの方々をお迎えできたことでした。それに、親子連れで参加した方々も大勢いて、小さいお子さんたちにも楽しんでいただけるようなプログラム構成を目指した私た

ちの願いに応えてくださったことは、特に嬉しく思いました。実際、コンサートに行きたくても、子連れでは参加できないという話しをとときき聞きます。ですから、バッハの森の「音楽会」を、親子で一緒に楽しめるコンサートとして続けていきたいと思っています。

それに、バッハの森の「音楽会」は、聴いて楽しむだけのコンサートではありません。参加者全員が、一緒に歌い、一緒に踊り、ハンドベルも振ってみて、実際に音楽をしてみるコンサートなのです。先日の「夏休みの音楽会」でも、ダンスのステップやハンドベルの奏法に興味を抱き、真剣に取り組んでくださる皆様の姿を見て、胸が熱くなりました。近い将来、もう少し拡大して、参加者の皆さんが練習した曲を発表できるような「音楽会」にしたなら、もっと面白くなるのではないかと夢を膨らませています。

今回は、12月21日（土）に開催予定の「家族で楽しむクリスマスの音楽会」です。歌と朗読で綴る「クリスマス物語」、皆で歌う「クリスマス・キャロル」、それにいろいろな楽器の演奏やダンスもある楽しいプログラムを予定しています。皆様のご参加をお待ちしています。

(岩淵倫子)

* * *

止まらない輪唱 歌い続けるユーブング(修練)

5歳児の心に残った音楽会

去る8月25日、「夏休みの音楽会」に5歳の娘を連れて参加しました。これまでバッハの森の活動に無反応だった娘ですが、なんと、今年は急にスイッチが入ってしまったようです。まずは、会で歌った輪唱が止まらなくなり、つくばから自宅まで2時間半の車中、ずっと相手をせがまれ続けました。大人には責め苦でした。それだけではありません。幼稚園が始まるまでの一週間、私が輪唱から逃れられないほどのご執心でした。

これだけ歌い続けたのだから、この輪唱が一番楽しかったのかと思いきや、はにかんで娘が言うことには、「J君（彼女がぞっこんの小学校5年生の男の子）とメヌエットを踊ったことが一番楽しかった」だそうで、そのことを幼稚園の「夏休みのひと言日記」にも書いていました。さらには、初めて体験したハンドベルにはまってしまい、戸棚から（装飾用の）ベ

ルを待ち出しては、「ハンドベル～」と言いながら、お祓いのように振り回して、私をハラハラさせました。

ことほど左様に、「夏休みの音楽会」は5歳児の心に残る会でしたし、家族で楽しむことができました。欲を言えば、毎週土曜日夕方の「コラールとカンタータ」に娘と一緒に参加して、コラールと一緒に歌えれば嬉しいのですが、まだまだ難しそうです。あの気まぐれの性格では、しばらくお預けのようです。

感激しながら歌うコラール

それにしても、コラールを歌うことは、毎週バッハの森に集まる皆さんの大きな楽しみの一つではないでしょうか。バッハの森では、折りに触れてコラールを歌います。歌う回数が増えれば増えるほど、コラールの魅力の虜になるのは、私だけではないようです。先日のワークショップで、あるコラールをドイツ語で歌った後、友雄先生の日本語訳詞でも歌いました。すると、クワイア・メンバーの一人が、「ああ、感動する～」としみじみと、こっそり呟くのが聞こえました。そして、長年、コラールを歌いながら学んできたから味わえる実感が、この呟きになったのだと思いました。

さらに思ったことは、これこそがバッハの森の音楽ではないかと感じたことです。言葉に籠められた思いや願いに、感激しながら歌う音楽です。もちろん、私たちは原語をきちんと発音し、正しい音程とテンポをとり、美しい響きを造り出す技（テクニク）を磨くことをおろそかにするわけにはいきません。けれども、言葉と音楽に籠められた「思い」や「願い」に感動する心があってこそ、バッハの森の音楽になるのではないのでしょうか。バッハの森のコンサートでは、ときに歌いながら感極まって涙を流すメンバーがいます。（泣いては歌えませんから、本当は困るのですが）、こんな場面に遭遇すると、バッハの森という場所で、アーレント・オルガンの伴奏で思いのたけを歌う「ユーブング」（修練）を重ねてきたことの大切さを実感します。

私は今、このユーブングに土曜日しか参加できないので、金、土と週2回参加できる方々をとっても羨ましく思っています。そして、クワイアの指揮者として、バッハの森のユーブングによって地道に力をつけている方々が、一緒に歌うクワイアであることを大変心強く思っています。バッハの森の音楽は、このような基盤に支えられているのです。

さらに多くの皆様が、このようなユーブングに、そしてクワイアに参加してくださることをお待ちしております。

(比留間恵)

日誌 (2013. 7. 14 - 10. 14)

7. 26 打ち合わせ 加藤拓末氏(明治学院歴史資料館)。
8. 3～4 イタリア・オルガン特別講習会(フェリス女学院大学音楽部オルガン科) 参加者 3名。
8. 3, 10 ハンドベル特別練習(夏休みの音楽会のため) 参加者各 4名。
8. 15～17 CD製作録音(明治学院創立 150周年記念) 参加者 21名。
8. 22 運営委員会 参加者 4名。
8. 25 夏休みの音楽会 参加者 37名。
9. 2, 14 会員による生け垣と芝生の手入れ 参加者 6名、2名。
9. 19, 26 運営委員会 参加者各 4名。
9. 21～22 秋のワークショップ 参加者 19名、16名。
9. 27 開講 秋のシーズン
10. 3, 10 運営委員会 参加者各 4名。

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ コラール・カンタータ研究 コラールとカンタータ (JSB)

9. 28 三位一体後第 8 主日のためのカンタータ「お前に告げられている、人よ、何が善なのか」(BWV 45);コラール「善きみ神よ、泉なる神」。オルガン: J. S. バッハ「してください、私が熱心にするように」(BWV 45 / 7)、當眞容子。参加者 11名。
10. 5 第 359 回、オルガン: J. S. バッハ「してください、私が熱心にするように」(BWV 45 / 7)、當眞容子。参加者 9名。
10. 12 三位一体後第 13 主日のためのカンタータ「お前はお前の主なる神を愛さなければならない」(BWV 77);コラール「これぞ聖き十の主の戒めなり」、「たとえ覚りあり」。オルガン: J. S. バッハ「主イエスよ、あなたはご自分を真の愛の模範になさいます」(BWV 43 / 11)。参加者 12名。

学習コース

- バッハの森・クワイア(混声合唱) 9.28 / 13名、10.5 / 11名、10.12 / 13名。
バッハの森・バロック・アンサンブル 9.28 / 3名。
バッハの森・ハンドベル・クワイア 9.28 / 3名、10.5 / 5名、10.12 / 4名。
オルガン音楽研究会 9.27 / 10名、10.11 / 8名。
コラール研究会 9.27 / 9名、10.11 / 7名。
クラヴィコード・オルガン教室 9.27 / 4名、10.11 / 4名。
オルガン・クラブ 10.4 / 3名。
読書会:聖書 9.28 / 6名、10.5 / 5名、10.12 / 4名。
オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習 7.16 / 3名、7.17 / 1名、7.19 / 1名、7.23 / 3名、7.24 / 1名、7.25 / 1名、7.30 / 2名、7.31 / 2名、

- 8.1 / 1名、8.2 / 1名、8.20 / 2名、8.22 / 3名、8.27 / 1名、8.28 / 1名、8.29 / 1名、8.30 / 1名、9.3 / 2名、9.5 / 2名、9.6 / 3名、9.10 / 3名、9.11 / 1名、9.12 / 2名、9.13 / 1名、9.17 / 3名、9.18 / 2名、9.19 / 2名、9.20 / 3名、9.21 / 1名、9.22 / 2名、9.24 / 3名、9.25 / 2名、9.26 / 3名、9.27 / 1名、9.28 / 2名、10.1 / 3名、10.2 / 1名、10.3 / 2名、10.4 / 3名、10.5 / 1名、10.8 / 2名、10.9 / 2名、10.10 / 3名、10.11 / 2名、10.12 / 2名。

* * *

寄付者芳名 (敬称略日付順)(2013.7.21～10.4)

下記の方々から計 174,000 円のご寄付をいただきました。

戸部将一・慶子。

建物維持積立寄付 (敬称略日付順)(2013. 7.21～10.4)

下記の方々から計 37,000 円のご寄付をいただきました。

斉藤妙子、加藤羊子、秋山信勝、木田みな子、伊藤香子、安積源也・和子、中村東子、相原暁子、比留間伸行・恵、大江友子、安西文子。

オルガン修復募金 (敬称略日付順)(2013.4.21～10.5)

下記の方々から計 180,958 円のご寄付をいただきました。

三条美千代、正村寿満子、秋葉啓子、加藤羊子、秋山信勝、木田みな子、安積源也・和子、中村東子、松岡真理、相原暁子、別所直樹・香苗、是井信朗、大江友子、比留間恵、石田友雄。

*本年 4 月以降、来年 3 月までに 200 万円を目標にオルガン修復募金を始めましたが、これまでのご寄付は、10 月 5 日現在、計 1,076,258 円となりました。

クリスマス・コンサート

12 月 15 日(日) 午後 3 時

合唱とオルガンとハンドベル

家族で楽しむ

クリスマスの音楽会

12 月 21 日(土) 午後 2 時

絵物語とダンスと歌とアンサンブル